

- 小林達雄 1978 「縄文土器の製作」『日本の美術 145 縄文土器』 至文堂
- 小林達雄 1979 「土器作り」『日本の原始美術 1 縄文土器 1』 講談社
- 佐原 真 1967 「山城における弥生式文化の成立」『史林』第50巻第5号
- 佐原 真・鈴木公雄訳 1974 「ヨーロッパ先史時代の土器作り」『考古学研究』第20巻第4号
- 佐原 真 1986 「1 粘土から焼き上げまで」『弥生文化の研究 3』 雄山閣
- 杉原莊介他 1976 「加曾利南貝塚」 中央公論美術出版
- 中村哲也 1990 「古屋敷遺跡早期第IV群土器の胎土・製作技法の特徴」『古屋敷遺跡調査報告書』 富士吉田市史編さん室・古屋敷遺跡調査団
- 深澤芳樹 1985 「土器のかたち一歳内第1様式古・中段階について」『紀要 1』 財團法人東大阪市文化財協会

<資料紹介>

千葉県四街道市千代田遺跡採集の土偶 3例

田 中 英 世

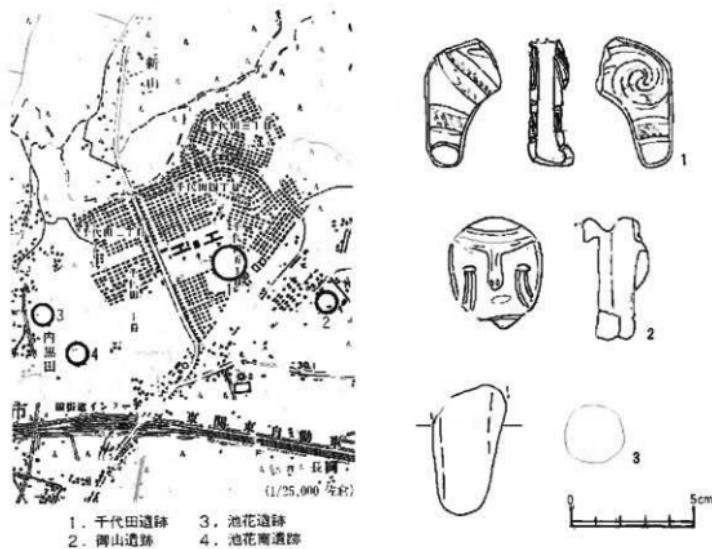
I

千代田遺跡は鹿島川下流の小支谷（手縫川上流）に位置し、古くから「炮烙台貝塚」（伊藤他1959）や「八木原貝塚」と呼称されており、過去3度に亘る発掘調査により縄文時代の住居址14基の他に、ハマグリ・シオフキを主とした貝層も検出されている（八幡他1972、米内1977・1978）。從来より後期から晩期前半の良好な遺跡として知られており（註1）、周辺には吉見台遺跡・池花南遺跡・御山遺跡等の晩期の諸遺跡が所在する。

ここに紹介する土偶は昭和49年4月の踏査の折りに採集したものである。踏査時には既に造成が行なわれており、地形等は確認できなかったが、公園として残される予定の貝塚とは道路を隔てたすぐ北東部にあたり、土器は採集されなかった。昭和46年の発掘調査により第V区とされた地点の南西端にあたると思われる。

II

第1図1は左足の部分で現存高5.4cmを測る。前面には腰部に2本、中央部に1本の縄文帯を有し、裏面には沈線により渦巻文を施す。



第1図 千代田遺跡と採集遺物

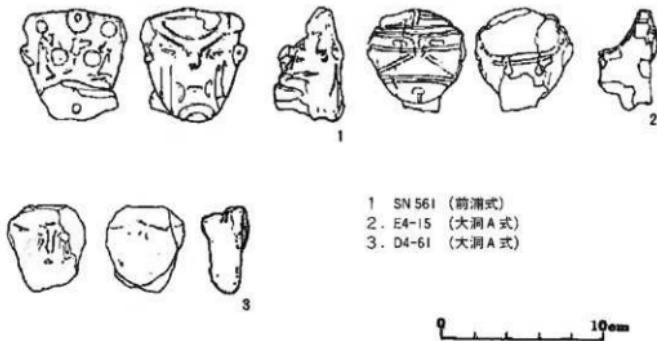
同図2は現存高4.6cmで楕円形を呈し、T字形の隆帯により眉と鼻を表わし、刺突により、目と口を描出している。眉の上と頬の下に横位1条の、左右の目の下には縦位2条の沈線を施している。

同図3は粗雑な、文様を持たないもので、現存高5.2cmを測る。所謂下位土偶（鈴木 1982）とされるものである。

III

1の土偶は充填纏文と渦巻文で特徴づけられるもので、安行Ⅲb式期のものと思われる。2の土偶は、顔面が前に突き出す特徴や頬および額の沈線による表現は、西広貝塚（米田 1977）のSN561 晩期包含地点より出土した前浦式期のものとされている土偶（第2図1）に類似するが、眉および刺突による目の表現は、同貝塚D-4区から出土した大洞A式期のものとされている土偶（第2図3）に近く、この上偶もほぼこれに近い時期のものと思われる。

千代田遺跡からは80点に近い上偶が出土しているが、晩期の報告例は少ない。千葉県の晩期の土偶については昭和55年の市川博物館による集成（市立市川博物館 1981）以降、鹿野光行氏



第2図 西広貝塚出土土偶

(熊野 1983) や原田昌幸氏(原田 1984・1985)、鈴木正博氏(鈴木 1989)等による資料紹介や編年が行なわれており、様々な問題点の指摘もなされている。周辺に位置する池花南遺跡からは、千葉期の包含層から有耳土偶が出土しており(千葉県文化財センター 1986)、子和清水遺跡でも千葉期の包含層から福島県西方原遺跡に類似が求められ、大洞A'式土器に伴なうとされている土偶(中村 1988)の肩の部分が出土している。

土偶を採集した第V区についての発掘所見は「縄文時代は本区東端部に晩期が、西端部に後期の住居址および包含層が検出され、両者に挟まれた地域では、微々たる量の土器破片が発見されただけであった」(八幡他 1972) (註2)とされているが、支谷を隔てた南側の第IV区でも良好な晩期の包含層が存在している他、第V区からは浮線網状文を行する土器も検出されている(註3)。未報告の資料中には多くの晩期の土偶の存在が予想され、今後の発表が期待される。

(財團法人千葉市文化財調査協会)

註

- 1 この他に表掲資料の報告として、田川直「千葉県四街道市千代田遺跡採集の資料(1)」(奈和第26号 1988)がある。
- 2 後期においても第IV区と第V区においては、遺跡の在り方に相異があることが指摘されている(小川 1989)。第IV区における晩期包含層については「第5号住居址より北東50mの地点に晩期安行IIIa式から安行IIIc式、前浦式土器の出土が知られている。これはV区の東端で検出された晩期包含層と類似する。なおこの地点とは一分支谷を挟んでわずか450mを隔たるものである。しかし晩期包含層として類似するとはいっても、IV区では初頭にその中心をおくのに対してV区では中葉におく。」とされている。

3 報告されている浮線文土器は水1式に並行するものと思われる。千葉県の浮線文土器は3期に分けて考えられ、第1期には石道谷津遺跡・西広S N561晩期遺物包含地・殿台遺跡第VI群土器、第2期には池花南遺跡・五斗町遺跡、第3期には龍正院貝塚・高崎新山遺跡が相当し、荒海貝塚第六群土器・殿台遺跡第1群土器・山武姥山群貝塚の各資料は第2期から第3期に亘るものと考えられる。千代田遺跡の浮線文土器は第3期に相当する。

参考文献

- 市立市川博物館 1980 『千葉県の土偶』
伊藤和夫・金子浩昌 1959 『千葉県石器時代遺跡地名表』 千葉県教育委員会
小川和博 1989 「千代田遺跡雑感」『竹籠』第6号
鈴木正博 1982 「埼玉県高井東遺跡の土偶について」『古代』第72号
1989a 「安行式土偶の基礎」『古代』第87号
1989b 「荒海土偶考」『利根川』10
渡野光行 1983 「安行の土偶観書」『歴史公論』No. 94
千葉県文化財センター 1986 『千葉県文化財センター年報12』
1989 「弥生時代」『房総考古学ライブラー』4
原田昌幸 1984 「成田市殿台遺跡出土の土偶」『なわ』第22号
1985 「印旛沼周辺における低地遺跡の研究—印旛村吉高一本松遺跡出土資料報告」
『なわ』第23号
中村五郎 1988 『弥生文化の曙光』 未来社
八幡一郎他 1972 『千代田遺跡』 四街道千代田遺跡調査会
米内邦男 1977 『千代田遺跡発掘調査概報』 四街道遺跡調査会
1978 『八木原貝塚調査報告』 四街道遺跡調査会
米田耕之助 1977 『西広貝塚』 上総国分寺台遺跡調査団編

貝塚博物館紀要 第18号

1991年3月25日 印刷

1991年3月31日 発行

編集・発行 千葉市桜木町163番地
千葉市立加曾利貝塚博物館
TEL 0472(31)0129

印刷所 御正文社